

慣習とのはざまで一ローカル女性 NGO の選択

名古屋大学大学院文学研究科博士研究員 浅野史代

「開発」という用語が第 33 代アメリカ大統領トルーマンの就任演説のスピーチで用いられてから、開発はその援助の流れから世界を第一世界／第三世界、北／南、先進国／発展途上国と二分してきた。90 年代活発であった開発言説アプローチにおいては、開発とは西洋の知識と権力の体系のもとに構成された言説であると、開発援助における先進国と途上国との間の権力の問題が盛んに議論された（例えば Escobar1995, Ferguson1990）。しかし、それらの批判は、あくまでも世界システムにおける先進国の暴力性に焦点を当てている。一方で、人類学、特にフェミニズム／ジェンダー人類学においては、男女間の差異やその他の様々な関係性の差異に目を向け、その先にある権力の問題を追究してきた。しかも、その権力の問題は人類学ならでは、フィールドにおける、いわばミクロな問題群に焦点が当てられている。それは決してマクロな社会的状況から切り離されたミクロな分析を意味するのではなく、むしろ、個人の日常における実践の中にマクロな権力関係の影響を読み取るということである（Abu-Lughod1991:150）。

それらを受け、本発表ではブルキナファソ、ビサ社会において、ある一人の既婚女性が禁制に違反した嫌疑をかけられたことに対するローカル女性 NGO の選択について、草の根的な活動を展開する上では、その活動の内容以前に、慣習や権力を持つ男性、特にクランの長との関係を円滑に保つことが欠かせないことを指摘する。

この NGO は、2000 年には国内 3 州において 11,000 人の会員を有する、ブルキナファソでも有数の大規模な組織である。1975 年に地域の 5 人の女性によって、女性たちが直面している経済問題を相互扶助によって改善しようと組織された。以来 30 年以上、社会的に力を持たない女性や女兒、独り身の老人、身体障害者を対象に農業・経済・社会分野において様々に活動を展開している。

この NGO が主に活動するビサ社会には数多くの禁制が制定されている。特にこれらの禁制は既婚女性に課されるものが多く、女性たちは禁制に違反しないように注意を払い、日々を過ごしている。禁制に違反すると夫や子ども、母親などに災厄が降りかかり、病気になったり死に至ったりする。すべての禁制が一律に重大であると考えられていないが、既婚女性が第一に遵守しなければならないとされているのが、「姦通を犯してはならない」という禁制である。重大な禁制の場合、災厄の回避方法がひとつ存在することが多いが、姦通の禁制には 3 つの回避方法が存在する。このことから、姦通の禁制が生家や婚家の平穏を揺るがすものであることがみてとれる。最も重大視されている姦通の禁制ではあるものの、この禁制に違反したとされる女性は少なくない。本発表では、中でも、発表者の滞在中に姦通の嫌疑をかけられた既婚女性 M の事例を取挙げる。

ローカル女性 NGO の村内ファシリテーターである M が、姦通の嫌疑をかけられたのは次のようなエピソードからである。あるとき、NGO の事務所でパーティーが開催された。M は職員からその給仕を依頼され、早朝に隣町の事務所へ向かった。パーティーが終了し

たときには夜が更けていて、屋敷まで帰るのは危険だと判断し、NGO 事務所に宿泊した。翌朝、日の出とともに帰宅した M を夫は隣の男性と関係をもったと決めつけ、彼女を屋敷に入れなかった。M は自分の無実を主張したが、姦通したと一方的に決め付ける夫と和解することはできなかった。クランの長の計らいで婚家に戻ったものの、夫から穀物が分配されることはなく、生活が困窮した M は生家へ戻らざるを得なくなった。ほどなくして夫が原因不明の病に倒れ、心配した夫の父親が占い師のところへ向かった。占いの結果、夫が病に倒れたのは M が姦通したためであると判明した。これ以上災厄が降りかかることを恐れた夫は「潔浄の儀式」をおこない、M に離婚を言い渡し、3 歳の娘を夫の母親の生家へ預けた。M が外泊してから 5 ヶ月後のことであった。

この一連の事件は瞬く間に近隣村に広まった。当初、個々の NGO 職員は M をかばう発言をしていたものの、夫が病に倒れ、姦通したという占いの結果が出て以降、状況は一変した。NGO の代表が村に遣いをよこし、M の件に組織はまったく関係していないことをクランの長をはじめとする長老たちに主張し、また、M を村内ファシリテーターから解任したことから、M は NGO から追放された形となった。

そもそも、この NGO は夫婦間の問題が組織に及ぶことを嫌う。NGO は男性の会員を受け入れていないわけではないが、設立にかかわったのが女性ばかりであり、組織名が「女性の家」であることもあって、女性メンバーが大半の組織である。男性が圧倒的な権力を持つ社会で女性組織が 30 年以上存続することが可能であったのは、組織が地域の慣習に対して敬意を払うことを忘れなかったためである。慣習を批判するのではなく、慣習に則ったうえで、女性たちの自立を促そうとしていたのである。しかしながら、女性の相互扶助による自立を組織目標に掲げているものの、今回の M のケースのように、慣習に違反した嫌疑をいったんかけられてしまうと、実際のところなす術がなく、彼女を組織から追放することで慣習やそれらを司る男性たちに配慮せざるを得ない。仮に M をかばうようなことがあれば、これまでに築いてきた男性、特に権力を持つクランの長らとの関係が崩れ去ってしまったかもしれない。

組織がこのように選択したのは、ローカル女性 NGO という地域に密着した草の根的特徴を備えた組織だからこそである。女性の自立を目指す NGO ではあるものの、組織の活動を存続させるためには、第一に地域権力との関係を友好に保つ必要があり、そこにローカル女性 NGO の脆弱さと限界を指摘することができる。

参考文献

- Abu-Lughod, Lila (1991) "Writing Against Culture", R.G.Fox, ed. *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, School of American Research Press, pp137-162
- Escobar, Arturo (1995) *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World*, Princeton University Press
- Ferguson, James (1990) *The Anti-Politics Machine: "Development", Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*, University of Minnesota Press